

# 幼児教育課程における「表現」活動の一方法

～古代象形文字を題材として～

平嶋 一臣

## One Way of Expression Activity in Early Childhood Education Course

～A Subject Ancient KOUKOTSU Character～

by

Kazuomi Hirashima

キーワード 「表現」活動 古代文字 彩色 発展的表現 協力学習

### はじめに

幼稚園・保育園・認定こども園における新教育要領・指針『表現』の項には、この時期における表現活動が、「感性」育てとの密接なつながりを、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」と、言い表している。

また、その「ねらい」として

- ① いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- ② 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- ③ 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。（アンダーラインは筆者）を挙げている。これは「表現」活動の主たるねらいを、「美しく表現」すること、「個性に基づいた表現」であること、「表現の形態・様態について固定概念にとらわれないこと」としているのである。

さらに、「表現」活動の具体的な内容を次のように示している。すなはち、

- ① 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
- ② 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- ③ 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- ④ 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり作ったりなどする。
- ⑤ いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。

---

受理日：令和元年 11 月 30 日

純真短期大学こども学科特任教授 純真学園大学客員教授

- ⑥ 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
- ⑦ かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
- ⑧ 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

の8項がそれである。

また、これについては、幼児期の感性育てが、単に上滑りな経験・体験学習に陥ることが無いよう、つまり、十分に五感を研ぎ澄まし、広く深く幼児期の充実した学習内容となるよう、さらに具体的に「内容の取扱い・留意事項」で言及している。

- ① 豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の子どもや保育士等と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。
- ② 子どもの自己表現は素朴な形で行われることが多いので、保育士等はそのような表現を受容し、子ども自身の表現しようとする意欲を受け止めて、子どもが生活の中で子どもらしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。
- ③ 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、様々な素材や表現の仕方に親しんだり、他の子どもの表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。

が、それである。

この留意事項3項中のアンダーライン箇所が、今般の新教育要領で新たに行われた改訂箇所である。本論では、いかにしてこの改訂箇所を幼児教育の現場で具現化するかについて論じたい。また、本学幼児教育課程に学ぶ学生が、一つの教材を基に幼児も体験するであろう様々な「学び」を追体験する姿を見つめていく。

## 1 序論

本論は、幼稚園教諭・保育園保育士を志している学生に、教材開発の喜びを自ら体験させ、それを時系列的に追った実践報告である。

私は、将来幼児期の子どもを預かることになる本学学生に、自らこの表現活動の楽しさに気付かせたかった。それには、これまで私自身が幼稚園児・保育園児を対象に試みてきたプログラムを、学生自身が幼児に成りきって体験させなければならないと考えた。この体験により、「表現」活動を自分のモノとして納得し、将来幼児教育の現場で実践に努める教師となってくれんことを考えたのである。

また、今回の試みは、学生が自分の個性と融合させつつ、さらなる発展的表現となる教材開発・指導法開発へと取り組む姿勢に繋いでほしいと願うものである。このプログラムによる「表現」活動のねらいは次の通りである。

- ① 硬筆とは異なる) 筆の感触や弾力による書線の面白さに気付かせたい。
- ② 表現活動の幅の広さを体験させたい。

③ 筆・墨・画仙紙による表現の、あらかじめ計算できない独特の面白さに気付かせたい（一期一会的な墨の軌跡を体験する。味わう）。

④ 出来上がった作品を基に、さらに発展的表現へとつながる喜びを味わわせたい。今回は、本学短大1年生を対象に、90分×2コマでの授業の組立てを時系列で述べる。

- ① 教材を示す、書道具の取り扱い、課題説明
- ② グループによる共同制作（大作と命題法）
- ③ 個人による製作
- ④ 自作に物語（幼児向けの童話）を創り、作品に添付する。
- ⑤ 鑑賞会を開き、友人の作品を評価する

①②を1コマ、③④⑤を次週の一コマで取り扱うことにした。

以下、これらの流れを、作品創りを行っている学生の様子を中心に、本論で紹介していく。

## 2 本論

### (1) 教材を示す、書道具の取り扱い、課題説明

① 古代文字カードを全員に配布（次の2枚と、スライドで亀甲を紹介）



古代文字①



古代文字②



亀甲文字

古代（象形）文字（以下、古代文字）について、その歴史に簡単に触れる。

- ・ 紀元前の漢字のスタイルは、極めて絵画的な要素が濃い。
- ・ 古代文字を使って創作することは、未だ文字を意識しない幼児期にとって、抵抗感なく取り組む

このことを学生に知らせる。と同時に、ここで学生自身がかつて経験している学校書写的な文字の考えを取り去っておく。

共同制作に移る前の手順としては

- ① 様々な古代文字を筆と墨で半紙練習する
- ② 筆使いに慣れてきたところで、グループ毎にテーマ（題名）を決める
- ③ テーマにふさわしい古代文字を決め、文字の配置などを話し合う
- ④ 諸注意を行う

(2) グループによる共同制作 (大作と命題法)

① グループ別にテーマを決め、それにふさわしい古代文字を選ぶ

紙面中央部にタイトル名を書き、大小の習字筆で、古代文字を書き始める。文字の方向・大小などは自由。学生は、思い思いの方向から書き始める。以下はその作業風景。



「どんな動物園にする？」



「亀も泳がそうよ」



「雷ゴロゴロ、雲の上。どう？」



「命を大切に、このテーマでいこう！」



「テーマは『にほん(日本)』」



「おとぎの森の動物たちの集合」



「自然がいっぱい」



(まだ書けるところはないかなあ?) と思案中

## ② 作品を裏向けて着色(風景)

墨で下書きが終わると、少しの間乾燥させ、次にはこれを裏返しにして着色することを指示。表から着色するとせつかくの古代文字が色により消されていき、全体のイメージも濁色系が中心となり、発色が上手くいかないことを紹介。また、この手法は、著名な版画家、故・棟方志功の手法であることを紹介。

ほぼ乾燥したところで、①の共同作品をゆっくりと裏返す。着色用の筆は、①で使用した習字用の筆ではなく、大中小の刷毛を使う。一本の刷毛には一つの色と決めておき、混色を避ける（幼児に説明する場合、ここを慎重に）。学生による彩色が終わり、以下のような共同制作が完成した。



鳥・象・鹿・羊などを配置



亀・貝・魚・門などを配置



たくさんの亀・魚・水などを配置



鳥・魚・山・雨などを配置



母・楽・虹・雲・卵などを配置



造形室に完成作品を展示して批評会

「筆」「墨」と聞くだけで、既に抵抗感を持ち始める傾向の強い現代の若者。本学の学生も、この授業に入る前、各グループの机上に準備された道具類を見た時は、何となく憂鬱そうな顔が見られた。そのうち、(文字でありながら文字らしくない。案外自由に書けるような？ 手本を写す「書写(習字)」のようでもない。自分の感性の赴くままでいいような?)などの考えが頭をよぎり始めたのだろう。テーマを和紙の中央部にどっしりと書き終えてから、各自が古代文字書き(描き)に移るのは早かった。

「いいねー、大きいのはお母さんで小さいのは子どもかな? 同じ字でも変化を付けて素晴らしい!」「あなたはきっとイヌ好きですね?わかります」「タイやヒラメの舞い踊り、ですね。浦島太郎を書きたい所でしょうね?」「自然界のありとあらゆるものをかき集めましたね。平和な地球を望んでいるみんなの気持ちが伝わってきます」

等々、私は幼児に語り掛けるように(ここでは大学生相手なので、幼児語は使わなかった)一人ひとりに、また、グループ全体に声掛けをしながら机間巡視をする。学生は、褒められながら、益々手ごたえを感じ、すっかり幼児のような顔になり無心に共同作業を続けていく。

文字という意識が無く、筆・墨に対する抵抗感(苦手意識)は、すっかり取り除かれていることが見て取れた。絵を描きつつ文字にも親しみを持たせる。このような授業体験を幼児期(特に小学校入学前のカリキュラムとして)に、ぜひ取り入れたいものだ。また、ここでは「共同作業から協働学習へ」という、さらに大きな目標も持っている。今回学生たちの作業の様子を机間巡視していると、自然な形で共同の作業(制作)が協働的な学習へと移っていることを知った。ここからも、上記の目標に近づいていることを、改めて認識させられたところである。

個々人の生き方・考え方を尊重しつつ、周囲との協力は避けられない。将来にわたって「生きる力」の礎ともなる人生観構築へと繋がる学習の初歩の初歩を体験させるためにも、幼児期これに類する教材開発と、多方面のカリキュラム作成が、今後待たれるところである。

(もっと彩色の時間が欲しい、文字を増やしたい)といった顔が、学生に見られたが、一コマ目90分の授業を終え、次週の予告をする。次週は個人作品なので、各人テーマを決めておくことを伝えて終わる。

### (3) 2時間目(2コマ目)個人製作の様子

#### ①テーマ(ストーリー)を決め、古代文字を和紙に書く

和紙は半紙4枚分ほど。各自物語を考えて、古代文字を集字してから、作品に取り掛かる。前時の学習の経験があり、学生は手順も分かっているので、活動に移るのも素早かった。以下の写真は、個人作品の制作風景。



虹と雨。物語も出来上がっているようだ



床に置いて書き始めました。幼児の気分？



大河に船を浮かべて・・・



木よりも大きい鳥。次は何を？



雲と虹の中に鳥が三羽。どんな話が？



古代文字資料を見つめる真剣な目

## ②色付け(和紙の裏面に着色をしていく)

色塗りも、既に前時で経験しているので慣れたもの。裏からの彩色なので、はみ出て塗っても心配ない。作業もかなりスピーディー。



ストーリーを考えて色を選択



ほぼ完成。早く表面から見たいと焦る心



他の色と混ざらないように気を付けて



物語を想像してしまいます



元気なミドリ亀をメインに



個人作品制作風景（短大工作室）

### ③完成作品(一部)

絵具(ポスターカラー)が乾燥し、裏を返すと・・・





紙面いっぱいに虹に雨



降るような星空の下、舟が一艘



大きな船でひとり旅、そこに魚も……



広い門に友と心。どんな話でしょうか？

④個人の作品に向けての物語創りおよび自己評価（感想・振り返り・今後の課題を含む）

完成作品を基に、お話と今回の作品への取り組み、それに新たな気づきや反省点も含めて発表しました（紙面の都合で8名のみ）。

☆印は古代文字を使っの 200 字物語 ★印は作品についての自己評価等である。



☆『雲と太陽』 R.K.

ある日のことです。お母さんとお散歩をしていると、黒い大きな雲が、山の向こうからずんずん出てきました。それまでとっても明るかったのですが、あっという間に暗くなってしまいました。黒い大きな雲の後ろからは、小さな雲もついてきて、ザーザーと雨も降らし始めました。でも、雲の後ろをじーっと見ると、小さな太陽が隠れていました。太陽は、大きい雲の後ろから出てこようと一生懸命頑張っています。あと少しで晴れるかな？

★古代文字という言葉もよく知りませんでした。初めてのことで、知ることが多い勉強でした。自分が今当たり前のように使っている漢字の歴史を知るのも大切なことと思

ました。筆を持ったのは中学生以来の事でした。古代文字を書くのは、自分の想像したことを自由に書くことや描くことができ、懐かしい気持ちと新鮮な気持ちを同時に楽しむことができました。子どもたちにも、文字を描く楽しさを伝えていけたらなあと思います。



☆『てるてる坊主さん、ありがとう』 M.N.

今は6月。梅雨の真ただ中。ある3人家族の親子が、「雨、やまないかなあ」と空を見上げながら話していました。太郎は、お母さんに「お母さん、早くお出かけしたいなあ。いつになったら雨止むの?」と聞きました。お母さんは「一緒にてるてる坊主作ろうよ」と子どもに言いました。すぐに二人はてるてる坊主を作り始めました。その夜、早速てるてる坊主をマンションのベランダにぶら下げて寝ました。朝が来ました。するとどうでしょう、空はすっかり晴れているではありませんか。「わーい、わーい」明るい空を見上げながら、太郎は何度も万歳をしました。太郎は早速お母さん・お父さんに手を引かれ、イヌのジローも連れて町の公園にお散歩に出かけました。(おわり)

★「父」「母」「子」「犬」「虹」5つの古代文字を使って、物語を作ってみました。色付けは、それぞれの文字のイメージを思い浮かべながら考えました。「子」の文字は、意識して元気いっぱい歩いている様子を表したつもりです。雨から晴れへの空の変化も、うまくいったような気がします。



☆『虹と子どもたち』 Y.K.

ある日のお昼休みのことでした。仲良し兄弟とお母さんが、黄色い花畑のある公園を散歩しておりました。すると、お兄ちゃんが遠くを指さして不思議そうな顔をしました。弟もその方を見て、不思議そうな顔をしました。「お母さん、あれなあに?」と、二人は声を揃えて言いました。お母さんは優しい笑顔で「あれは虹っていうのよ。あれを見つけたらいいことがあるんだって。よかったね」と教えてくれました。兄弟二人は大喜びしました。(おわり)

★この授業を通して、現在の漢字がどのようにしてできたのかを知りました。古代文字プリントの文字をアレンジして、斬新に描くのが楽しかったです。文字の大小の変化をつければ、もっと良かったように思います。この経験をいづれ子どもたちにも伝えたいと思います。



☆『鹿と虎』 M.T.

昔々のある夜の事です。静かな森に、一頭の鹿が家族と離れ離れになりさまよっておりました。森にはたくさんの虫の声だけが響いています。腹ペコになった鹿が、何日も何日も暗い森を歩いていると、どこかからガサゴソと音がするではありませんか。鹿は、音をたてないように、こっそりこっそり歩きました。と、その時

です。いきなり大きな木の陰から虎が飛びかかってきました。鹿は急いで逃げました。追いつかれようとした時のことです。たくさんの虫たちが、虎に群がって行く手を遮ってくれました。鹿は助かり、森の中に消えていきました。（おわり）

★虎のインパクトを出したいと思い、虎を大きく黄色を強めに塗りました。文字を大きく書いたけど、インパクトを強く出せなかったのが、色の付け方でいくらか虎の強さが出せた気がします。この物語にはやはり色が必要なようです。虫をうまく表現できませんでした。小さい虫をぎっしりと書けば、この話にふさわしい内容になったようです。



☆『ウサギとカメ』 T.N.

ある日のことです。一匹のカメさんが、ゆっくりゆっくり、山に登っておりました。そこへ一羽のウサギさんが、ぴょんぴょんと跳ねながらやってきて、「やあやあカメさん、あんたは本当に遅いね」と言いました。それを聞いたカメさんは、かんかんに怒って、「本気を出したら僕だって速いんだぞ!」と言いました。それを聞いたウサギさんは、笑いながら、「それじゃあ、山の頂

上まで、どちらが勝つかかけっこしよう!」本気を出したカメさんは、空を飛んでまたたく間に、山を越してその向こうに輝いている虹の橋まで行ってしまったとき。ウサギさんは、それからはいばることを止めました。（おわり）

★初めは何気なく気に入った文字を並べていたのですが、書き終わって4つの文字を眺めているとこんな物語ができていました。思ったより、元気いっぱいの字が書けました。もっとほかのストーリーを作りたいと思いました。



☆『夢の中』 A.H.

昔々のことです。ある村に心の優しい太郎君という男の子がおりました。ある夜の事です。太郎君は龍の背中に乗って空を自由に飛んでいる夢を見ました。空から見る村の景色は、それはそれは

美しく、キラキラとまぶしいほどでした。自分の村がこんなに美しかったことに初めて気づいた太郎は、とても幸せな気分になりました。太郎は、そのままお月さんの方まで上っていきたくまりました。この夢がいつまでも覚めないことを願いながら…（おわり）

★古代文字を使って物語を作ることは初めてでした。どういう物語にするか悩みました。古代文字のプリントを見ていると、「龍」の字に魅かれました。この字を実際に和紙に書いてみると、案外伸び伸びと思うままに書けました。墨が乾き色を塗ったのですが、もう少し「龍」の字を目立たせたが良かったように思います。今回の授業で、私は子どもたちにも、古代文字の魅力や楽しさが、伝わるのではないかと感じました。



#### ☆『新・七夕物語』 M.S.

機織りが上手な働き者の織姫は、独りぼっちということもあり、彦星との結婚を許され、結婚することになりました。しかし、仲良しすぎた二人は、急に遊んで暮らすようになってしまいました。そこで、怒った神様は、二人の間に天の川を作り引き離してしまいました。その時、まじめに働いたら一年に一度だけ二人を会わせて約束をしてくれる約束をしてくれました。それからという

もの、まじめに働くようになった二人は、七月七日・七夕の夜、たくさんの星が光る中、織姫と彦星は一年に一度会える夜を天の川で過ごしました。（おわり）

★古代文字を並べて、物語を作るのは初めての経験でした。初めは、どうやって作るのか迷いましたが、色も使って表現できるので、何とかイメージを膨らますことができました。私は筆を使って字を書くことを避けてしまうところがあるので、最初は気になって仕方がありませんでした。その気になったことを、いつの間にか忘れてしまっていました。将来保育士になったら、子どもたちにも是非体験させたいと思いました。



#### 『二羽の小鳥が飛びました』 R.K.

今日はとてもおめでたい日です。二羽の小鳥たちが初めて飛べた日だからです。これまで、小鳥たちはなかなか飛べることができず、お父さん鳥もお母さん鳥もお兄さん鳥も、ずっと心配していたのです。ところがその日が突然やってきたのです。いつものように、家族に見守られながら、小鳥たちは勇気いっぱい遂に飛ぶことができたのです。お父さん鳥・お兄さん鳥

は二羽の小鳥をしっかりと見届けています。お母さん鳥の目からは、うれし涙がポロリと落ちました。（おわり）

★今回の授業で、初めて古代文字というものが在ることを知りました。古代文字を使い、字の大きさや組み合わせ、描き方や色の付け方次第で、様々なストーリーができ、面

白かったです。今回私が考えた話は、明るいおめでたい話だったので、どこかに太陽を入れたり、明るい色をもっと使ったりすれば良かった気がしています。幼稚園の年長さんでもできるのではないかと思います。将来保育者になったら、制作の時間に是非やってみたいと思います。

#### (4) 学生への意欲付けはできたのか？

これについては、★印に本人が語っている言葉を基に考察していきたい。その中でも、アンダーラインを引いている部分に、学生の今後この経験を活かしたい姿、工夫したところ、反省点など本音が出ている。以下、その点を中心に整理する。

- ① 初めは筆で書くことに抵抗があったが、書く（描く）うちに抵抗感が薄れ、伸び伸びと活動できた。面白くなってきた。ほかの物語で作ってみたい。
- ② この初めての体験（手応え）を、いつの日か自分のクラスの子ども（幼児）にも体験させたい。
- ③ 文字と色のバランスをもっと考えると、自分の描いたイメージに近づくことができる。
- ④ 文字の持つイメージを色彩でどう表現すれば、より効果的なのだろうか。
- ⑤ 自由に想像できる創作体験の喜び、素材（ここでは古代文字）を、発展的に捉える楽しみ。

このように、多方面から自分の作品を振り返り、客観視しながら、多方面から自分や友人の考え方に気付き始めた。今回の実技に関わらず、幼児教育コースで五感を通した様々な学びを繰り返し、さらに多方面の「気付き」を経験するに違いない。この「気付き」こそが、教師としての感性を高めていくことと信じて疑わない。

### 3 結論

幼児作品・学生の作品と反省・手ごたえを読んでも、今後十分に幼児教育課程で実施していくことが可能と考える。（幼児教育の現場でも急ぎ実践していただきたい）。学生の活動の様子からも、様々な五感の研ぎ澄ましが必要な場面が随所に見られた。この楽しさの中の緊張感、またその反対も幼児期の学習に最も求められていると考える。

今回は、古代文字（甲骨文字）を題材として、主に幼稚園・年長組を意識した「表現」活動の一つの方法を探ってみた。やわらかい脳を持っている幼児にとって、五感の受け取りは、多種多彩である。この貴重な時期にある幼児のためにも、今後、素材・教材・題材を広く深く求めていくことは急務である。そこに至る前提として、何よりも教師の感性（力）が必要であり、教育要領が示している「豊かで美しい発想」に基づいていることは論を待たない。

#### おわりに

筆による「書表現」が、今後ますます減少化傾向にある現代。その一方で、この「表現」活動は、紙面への筆触・墨のにおい・墨色および彩色時の色彩感覚加え、体全体を使って

の筋感覚刺激など、人間の持つ感覚を総動員する経験をも内包している。

今回の試みの結果、古代（象形）文字を素材としているために、幼児にも書写を苦手としている児童にも、文字を書くという意識が少なく、比較的スムーズにこの体験学習へと誘うことが分かった。この経験を、いずれ保育園・幼稚園教諭（保育士）として指導に当たる幼児教育課程の学生に経験させたいという考えを強くしている。その経験が、「書」「色彩表現」に興味がある幼児教育希望の学生に浸透し、やがて卒業後の就職先で、先輩方・幼児教育者間に広がっていけば、と淡い願いを描いている。

本年度、保育・幼児教育課程に学ぶ学生のオムニバス講座『表現』を、に2コマ担当することになり、『古代象形文字を題材とした表現活動』の授業を行うことができた。今後は、これまでに培ってきた「書」からの学びを発展させ、幼児教育の現場で教師自身を取り組みやすく、かつ効果的な学びへとつながるよう改良を重ね、研鑽に努めていきたい。

### 参考図書

- 白川 静解説『書跡名品叢刊代 107 回 殷・甲骨文集』二玄社、1970 年
- 佐野光一編『甲骨文字を書く』天来書院、2011 年
- 石田千秋・松丸道雄・新井光風・牛窪梧十共著『甲骨文・金文』二玄社、1990 年
- 張 大順著『甲骨文書法』木耳社、2012 年
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』2019 年
- 小林石寿著『甲骨文字精華』木耳社、1985 年
- 下中邦彦編『書道全集第 1 巻・中国・殷、周、秦』平凡社、1965 年
- 武田伊勢雄編『漢字千里眼』勢光瑠古典研究会、1971 年
- 木耳社編集部『甲骨・金文名跡選』木耳社、1998 年
- 張 大順著『甲骨文字千字文』木耳社、2002 年
- 白川 静著『字統』平凡社、1984 年
- 山田勝美著『漢字の語源』角川書店、1976 年
- 加藤常賢著『漢字の起源』角川書店、1970 年
- 白川 静著『漢字』岩波新書 747、1970 年
- 林田 稔著『当用漢字物語（上巻）（下巻）』西日本新聞社、1960 年・1961 年
- 藝文印書館印行編『校正甲骨文編』台湾藝文印書館、1974 年
- 厚生労働省『保育所保育指針』2019 年
- 城南山人著『甲骨文字書道のすすめ』日貿出版社、1984 年
- 文部科学省『幼稚園教育要領』2019 年
- マール社編集部編『古代文字で遊ぶ』マール社、2001 年
- 魚住和晃著『書の十二則』NHK出版 187、2006 年
- 上田桑鳩著『書の話・第一巻』教育図書研究会、1964 年
- 江守賢治著『字と書の歴史』日本習字普及協会、1980 年